

室 報



浅香中央公園の車輪モニュメント

◀目次▶

部落問題研究班フィールドワーク(浅香) ……	2
天王寺公会堂の記憶—大阪府水平社創立の地 …	4
コロナ禍から何を学ぶのか ……………	6
コロナ禍の心理学 ……………	8

研究学習会記録 <small>安食真城先生</small> 性の多様性を認めあうキャンパスをめざして ——龍谷大学の現状と課題から ……………	10
2021年度 人権問題研究室 公開講座 2021年度 人権問題研究室 研究学習会、 編集後記……………	12

部落問題研究班フィールドワーク（浅香）

若槻 健

2021年9月14日に部落問題研究班の企画で大阪市浅香地区フィールドワークを行いました。二本の講演を受講し、町を歩き、地域の成り立ちや歴史、現在のまちづくりと課題について学びました。浅香地区は、大阪市の一番南に位置し、西側が大阪市立大学、南側に大和川、北側に地下鉄の車庫（現在は跡地に公園）東を幹線道路に囲まれ、かつては陸の孤島といわれていた地域です。浅香地区のまちづくりがどのように進められ、どこへ向かおうとしているのかお話しいただきました。

まず、地域のコミュニティ施設「ゆいま〜るの家」にて、社会福祉法人あさか会常務理事であり部落解放同盟浅香支部書記次長も務められる山本周平氏より、「浅香の歴史と現在のまちづくりについて」と題して浅香の歴史（成り立ち）、まちづくりの歴史（70年代以降）、新しい動き（コミュニティビジネス）などについて講演をいただきました。

はじめに山本氏がなぜまちづくりに取り組むのか、なぜ現在の方向性にまちづくりをすすんでいるのかについて、ご自身の生活史や家族、先輩たちの活動と絡めてお話しされました。自分たちのまちいっぱいある（つくられてきた）「宝物」を生かしていきたいという思いで地域での活動に本格的に取り組まれるようになったそうです。

その後、浅香地区の歴史、成り立ちについて、歴史研究の資料を紹介しながら説明されました。浅香地区は、1721年大和川の付け替え工事に際し、水をくむ人手が必要ということで、人が集められて北岸に杉本村の枝村がつくられたと古文書に記されており、これが村の始まりとされているそうです。

1935年には、大阪商科大学（現在の大阪市立大学）が村の西側にできます。当時、土地が奪われる、大学が村に来て商売にならないということで反対運動も起こったそうです。さらに1960年には大阪市営地下鉄が完成し、その車庫が村の北側をふさぐようにつくられます。東側

は幹線道路で人が渡れるような道路ではない。浅香地区は、周りの地域から隔離された陸の孤島ようになっていきます。1970年代の浅香地域は、大和川沿いにバラックが集中し、共同水道、共同便所、火事が起きたら消防車は入れないのでバケツリレー、台風が来たら浸水という厳しい環境に置かれていました。仕事も日雇い、文字を書くのも不自由する人が少なくなかったそうです。

その後、地域の対立がありながらも部落解放運動が進んでいきました。1974年には、大阪市立大学の協力を得て、地域の実態調査が行われます。その結果をもとに大阪市との交渉が進んでいったそうです。地域の環境改善について、河川敷回収、不良住宅の撤去、改良住宅・市営住宅の建設が進められていきました。並行して仕事を取り戻す運動と教育を取り戻す運動が進んでいきました。

1988年「地下鉄車庫跡地利用街づくり推進協議会」が生まれます。地元の声を生かしたまちづくりが進められていきます。その時に作られたのが「4つの理念」として受け継がれています。

にんげんの街。誰もが主人公であり、対等であり、平等である。

住民自治の街。住民が互いに助け合いながら、認め合い、尊重し合い、自立を最大限にする。水と緑の街。大和川を中心に土や木を感じ、春夏秋冬がある。

教育と文化の街。子どもたちが育ち、歴史も引き継がれ、新しい文化が生まれる街。

車庫跡地利用の目玉として、1998年に1万坪の浅香中央公園が完成します。いわゆる特措法が2002年に切れる前から、浅香地区では地域住民の力と知恵、そしてまちづくりの理念をもとに地域の課題を解決する活動が蓄積され、組織がつくられていきます。社会福祉法人あさか会やよさみ人権協会、アサカパーソナルリレーショ

ンズ株式会社…。

山本さんのお話から、実態調査を手寧に行い、個々のニーズを聞き取り、それをまちづくりに生かしていく姿勢が一貫して貫かれていることが伝わってきました。地域内外に様々なつながりをつくり、地域外から学びあい、助け合っていくことが大切にされていることも印象に残りました。

昼食を挟んで、三地区まちづくり合同会社 AKYインクルーシブコミュニティ研究所事務局長で、大阪大学大学院工学研究科博士後期課程の矢野敦士氏より「地域拠点と総合相談の再構築について」と題して特に総合相談の拡充等について講演をいただきました。

近畿圏では、隣保館が軒並み閉館し、他の用途の公共施設に転用されるケースが多いなか、大阪市では、建物ごと廃止されるという政策がとられました。これまで隣保館が担ってきた機能を代替する地域拠点をどのようにつくってこられたのかお話をいただきました。ここでも実態調査を行い、その結果をもとに課題を明らかに

し、解決策を練っていかれました。そのため住民の多様なニーズに丁寧に応じることのできる地域拠点がつくられていきました。戸建て住宅の一角を社会福祉法人あさか会が買い取って障がい者のグループホームをつくったり、市営住宅の空き住戸を活用して「ふれあいカフェコスモス」というコミュニティカフェをつくったり、地域の交流スペースとして「ゆいまーるの家」ができていきました。

矢野さんのお話からも実態調査に基づくニーズに応じた、そしてまちづくりの4つの理念に沿った居場所・地域拠点づくりが行われていることが印象に残りました。

その後、小雨の中、山本氏と矢野氏の案内で町を歩き、地域の過去、現在の拠点となる場所や建築物、町並みなどを見学して回りました。

地域住民の思いとまちづくりの理念を基盤に置きながら、実態調査を基にした戦略的なまちづくりが行われている様子を知ることができました。

(文学部教授)



写真1：山本周平氏の講演



写真2：ふれあいカフェコスモス



写真3：浅香中央公園の獅子像



写真4：矢野敦士氏の講演



写真5：DIYで改装した浅香会館

天王寺公会堂の記憶

—大阪府水平社創立の地

吉村 智博

“てんしば”の愛称をもつエントランスエリアで広く知られている天王寺公園内に、かつて「天王寺公会堂」という建物があった。わずか20年ほどの短い間ではあったが、近代大阪における集会や結社の最盛期に、部落解放運動、労働運動、女性運動、無産運動などにかかわって東奔西走した人びとの姿を見つめ続けた“歴史の証人”として人びとの記憶にとどめられている。

いま大阪市内の公会堂といえば、中之島にある「大阪市中央公会堂」を指すのが一般的である。しかし、大正デモクラシーと称される日本近代史の一時期には、裁判所や市役所などが立ち並ぶ北の官庁街・中之島と、娯楽施設や公園などが集中する南の玄関口・天王寺の双方に、豪華な建築様式を誇る2つの公会堂がそれぞれの風貌で庶民の活動を見つめていたのである。

そもそも天王寺公園の歴史は、1903（明治36）年に、日本近代化を国内外に披瀝するために天王寺一体で開催された第5回国内勧業博覧会にはじまる。延べ入場者数が530万人にのぼった日本帝国主義の象徴的イベントであった。大阪府内の部落からも皮革、靴、^{にかわ}膠など地場産業と縁の深い製品が数多く出品された。この巨大な博覧会に先立つ1900（明治33）年には、大阪馬車鉄道（現・阪堺電軌上町線）が天王寺西門前—上住吉間で開通していた。近世の版行絵図に必ずといってよいほど名所として登場する古刹・四天王寺と撰津国の一宮・住吉大社とを取り結んだ路線であり、2年後には大鳥居近くの下住吉まで延伸される。また同年、南海鉄道が関西鉄道との連絡を企図して、天下茶屋—天王寺間の支線（旧南海電鉄天王寺支線）の敷設に踏み切った。やや遅れて、阪堺電気軌道が1911（同44）年に恵美須町—市ノ町間で開通し、公園から坂を下った新世界の西側を縦貫していた。さらにその西側にはすでに日本初の純民間私鉄・阪堺鉄道（1885年開通の難波—大和川間、のち南海鉄道へ事業承継、現・南海電鉄南海線）も同じく堺方面へと快走していた。そのほか、大阪鉄道（1889年開通の湊町—柏原間、1895年開通の天王寺—大阪間、1900年関西鉄道が買収）のターミナルとなる天王寺駅もあり、ほぼ同じ

時期に市電網も充実していき、公園一帯はさながら交通の要衝地へと変貌していった。

かつての東成郡天王寺村と西成郡今宮村の両郡に跨る博覧会の跡地は、こうした交通インフラの整備によって利便性がますます高くなり、西側には1912（明治45）年にルナ・パーク（浅草に次ぐ日本版遊園地）とともに初代通天閣も開業し、新世界という一大遊興地がその姿をあらわした。一方、上町台地に位置する東側には1913（大正2）年に天王寺公会堂、15（同4）年に動物園、そして17（同6）年に市民博物館が相次いで開設されることになる。全国から大阪市内にも波及した米騒動（1918年）前夜のことである。動物園は、府立大阪博物館に併設する動物檻として市内中心部にあったが、動物の鳴き声や排泄物など音と臭いの問題が指摘され、南西部へと移転してきたものであった。また、市民博物館は、西町奉行所跡（現・マイドームおおさか）にあった府立大阪博物館に所蔵されていた資料をその母体として運営されることになった。天王寺公園はまさに、近代都市型のアミューズメントゾーンとしての様相を呈することになった。1920年代初頭の実測図からは、のちに拡張される動物園エリアの一角に博物館と公会堂が位置していることがみて取れ（図）、スナップカットにも写っている（写真1）。また、近代大阪の稀有な写真



図 1920年代の天王寺公園一帯



写真1 天王寺公会堂



写真2：新世界・ルナパーク(手前)と天王寺公会堂(右上)
※大阪市立大学都市研究プラザ「上田貞次郎写真コレクション」

を集大成している「上田貞次郎写真コレクション」にも明確に写し出されている〈写真2〉。

天王寺公会堂は、こうして近代の都市空間のなかに創出された公園内に1913年、旧大阪公会堂を移設する形で登場することになった。旧大阪公会堂というのは、現在の大阪市中央公会堂のやや西側に位置していたというから、その場所は、ちょうど大阪府立中之島図書館（府立大阪博物館図書室と旧大阪書籍館の蔵書を譲り受け1904年開館）と現在の中央公会堂（もとの豊国神社があった場所）の間あたりにあったようである（高橋理喜男『中ノ島公園の歴史的考察（その1）』1961）。この建物を前身とする天王寺公会堂はやがて、1933～34（昭和8～9）年の動物園の拡張にとまって解体されることになり、会堂としての機能は、辰野金吾や片岡安らが深く関わって1918年に竣工していた中之島公会堂に統合されることになった。天王寺公会堂の役割は、おおよそ20年という短命に終わった。

では、天王寺公会堂の内部はどのような設えになっていたのだろうか。さいわい、公会堂の平面図（『大阪市公文書館研究紀要』13号、2001年に掲載）が残されているので、それをもとに内部に分け入ってみよう。まず、北に面した1階のロビーから玄関を入ると、その左右に事務室と喫煙室がある。現在のような禁煙モード一色の世間からは想像もつかないが、2階部分と

あわせて3つの喫煙室が36坪（おおよそ120㎡＝77畳ほど）も用意されているという時代であった。南側に位置する正面舞台の両脇には9坪の楽屋と5.5坪の化粧室が配置されている。東側に便所が張り出す構造は、モダン建築の粋を凝らしたものかもしれない。そして2階には接待室がふた間用意され（計18坪）、来賓などの控室・休憩室となっていたようである。また、上階はコの字型に配された長椅子から階下の舞台を見下ろす構造となっており、この建築様式は中之島公会堂とよく似ている。まさに中之島と天王寺の両公会堂は「双生児」のように、大阪の文化・思想・運動の拠点となっていたのである。

そして、自主的な部落解放運動に深く関わった青十字社の本木凡人（本名・正胤^{まさつぐ}）とその同志で部落出身の岡部よし子^{よしこ}らも、この天王寺公園との縁をもっている。彼らの活動拠点となった青十字社は公園北門近くに事務所を構えており、茶臼山^{ちやうすやま}（慶沢園^{けいざくえん}などを含めて住友財閥の所有地）を市民に開放しよう訴える運動などをおこなっていた。青十字社は、世界規模の赤十字社に対抗するようにして命名され、「平和と平等」を掲げ、今でも人口に膾炙している「正露丸」の本舗も兼ねていた。本木は、岡部らとともに機関紙（タブロイド版）を発行し独自に部落差別撤廃を訴えたり、部落解放大講演会などを開催するなどした。

多くの人びとの繋がりが機縁^{きえん}となって、天王寺公会堂を会場として1922（大正11）年8月5日に結成されたのが大阪府水平社であった。創立の中心人物となったのは、栗須七郎、松田喜一、楠川由久らで、当日、会場には1,500人も参加者が集まった。大阪府水平社の事務所は、西浜部落内に置かれることになり、同時に西浜水平社も結成された。9月22日には、再び天王寺公会堂で大阪府水平社秋季演説会も開催された。

大阪府水平社の結成をうけて、傘下の水平社組織が燎原の火のごとく結成されていく。府内の水平社組織は最終的に1926（大正15・昭和1）年までに組織数にして33団体、加盟人員では2,380人を数えるほどの規模となった。

天王寺公会堂を拠点に組織的活動をおこなった人びとは、水平社同人の他にも数多く存在した。そしてその足跡は、デモクラシーの風潮とともに、集会、結社、演劇など華やかかなりし時代のひと駒として記憶に刻まれ続けていくであろう。（委嘱研究員）

[参考文献：吉村智博『大阪マージナルガイド』解放出版社、2021]

コロナ禍から何を学ぶのか

宮本 要太郎

魂をどこかに置き忘れた現代人

先日、吹田市立図書館を訪れたとき、ふと目にした絵本のタイトルが気になった。それがオルガ・トカルチュク『迷子の魂』（岩波書店、2020年）だった。彼女はポーランドの小説家で、2018年度のノーベル文学賞を受賞して日本でも有名になった。『迷子の魂』は、2017年に出版され、その後各国の言葉に翻訳されて広く読まれている（英語のタイトルは「The Lost Soul」）。絵本の内容を簡単に紹介すると、忙しすぎて魂をなくしてしまった男が、年老いた女医の助言にしたがい、「迷子の魂」をじっと待つことにし、やがてそれを取り戻す話だ。

男はなぜ魂をなくしてしまったのか。絵本の中に次のような言葉がある。

わたしたちを上から見たら、忙しく走り回る人で世界はあふれかえっているでしょう。みな汗をかき、疲れきっている。そしてかれらの魂は、いつも背後に置き去りにされて、迷子になっています。魂がじぶんの主^{あるじ}に追いつけないのです。これが大きな混乱のもとです。魂が頭を失う一方で、人びとは心を持つのをやめるのですから。魂にはじぶんが主を失ったのがわかるのに、人びとは魂をなくしていることに、往々にして気がつかない。

この「男」は現代人の象徴でもある。多忙な生活に追われて何か大切なものを忘れてしまっている現代人。漢字でも「忙」も「忘」も心を亡くすと書くように、そのこと自体は古代から認識されていたが、トカルチュクにいわせれば、心を亡くしていること自体に皆が気づいていない状態こそ、現代人の病根だということになる。

新型コロナウイルスが映し出した現代社会のカオス

そのトカルチュクが、『世界 2020年7月号』（岩波書店）において、新型コロナウイルスの蔓延は、現代人にとってそのような病的な生き方を反省する好機になるという。

ウイルスは、わたしたちがこれまで必死に否定してきたことを思い出させた。わたしたちが壊れやすい物質でできた、はかない

存在だということ。……「ニンゲン」という特質も、わたしたちを世界から分け隔てはしないこと。世界は巨大な網で、網の目の一つ一つをなすわたしたちは、あらゆるほかの存在と、その関係が目に見えなくても、従属し影響しあっているということ。どんなに遠い国の出身であろうと、何語を話し何色の肌であろうと、みながおなじ病に倒れ、おなじ恐れを感じ、おなじ死を死ぬということ。……わたしたちは、ウイルスによって気がついた。こうした危険にさらされて、じぶんがどれほど弱く無力に思えても、わたしたちのまわりには、もっと弱くて、もっと助けが必要な人がいることを。ウイルスによって思い出した。老いた父母や祖父母がいかに繊細で、いかにわたしたちの手を必要としているかを。ウイルスが示してみせたのは、せわしく動き回るわたしたちこそが世界の脅威であるということ。そしてそれは、これまでわたしたちが自問する勇気をなかなか持てずにいた、ある問いを突きつけてきたのだった。これほどまでに動き回って、わたしたちはいったいなにを探しているの？（25-26頁）

ここには、コロナ禍を前向きに捉える視点が示されている。すなわち、コロナ危機は私たちに、人間の脆弱性への気づきを促し、互いに助け合う精神を発揮する機会を提供しているのである。

網目の法則

2019年に発生した新型コロナウイルス感染症（COVID-19）は、瞬間に世界中に広がり、わずか2年の間に、およそ2.6億人が罹患し、500万人以上の死者を出して、今なお猛威を振るっている。これだけ多くの人が感染症に苦しんでいるのは、それだけ人体に及ぼすウイルスの影響が深刻なものだからであることは言うまでもないが、短期間にパンデミックを生み出したのは、それ以上に人為的な要因が大きいとされている。すなわち、グローバル化した世界の中で、人びとの移動と接触が感染拡大の主要な原因となったのである。

ほぼ100年前にもスペイン風邪のパンデミックが発生し、それによる死者数が全世界で4000万人とも5000万人とも言われているが、被害拡大の引き金となったのは、第一次世界大戦による人間の大量移動であった。まさに、トカルチュクが言うように、「ウィルスが示してみせたのは、せわしく動き回るわたしたちこそが世界の脅威であるということ」だったのである。

ただ単に人が移動したというだけでなく、行った先々で、知らないうちに様々な人と接触していたのであって、まさに「袖振り合うも多生の縁」ならぬ「コロナ移し合うも多生の縁」といった事態が生じたことになる。この事態は、吉野源三郎の『君たちはどう生きるか』（岩波文庫、1982年＝初出は1937年）の中で主人公のコペル君が唱えた、「人間分子の関係、網目の法則」を彷彿させる（先に引用したオルガ・トカルチュクも同じようなことを言っていた）。「人間分子は、みんな、見たことも会ったこともない大勢の人と、知らないうちに、網のようにつながっている」ということ（網目の法則）をコペル君は自ら発見するのだが、仏教的に言えば、すでに2500年前に「縁起」という言葉で示唆されていたことであろう。

コロナ禍の中の人道主義と非人道性

ところで、新型コロナウイルスは、多くの痛みと悲しみをもたらしたが、希望の光も垣間見えた。それは「完全な平等」ということである。すなわち、ウィルスは人種の違い、貧富の違い、国籍の違い、思想の違いなどと関係なく、相手が誰であっても分け隔てなく、公平に感染する。もちろん、体質的に罹りにくい人、罹っても発症しにくい人などはいらるであろうが、少なくともウィルスにとって、人間を「分断」させている社会的・政治的な垣根はいとも軽々と乗り越えることができるものである。その意味でウィルスの前で人間は「平等」なのである。

それに対してワクチン接種は逆の現象を提示している。すなわち、経済力の差、政治力の差、科学技術力の差が、歴然と格差を生み出しているものであって、ワクチン確保を巡る国同士のあるいは自治体同士の駆け引きなどを見ていると、ワクチンによってむしろ人間の「非人道性」が浮き彫りになった感がある。

いずれにしろ、誰もが被害者になりうるという点では、自然災害と類似している。とりわけ大きな自然災害の前では、人間社会が生み出したさまざまな区分は、些末なものとなり、すべての人が共に同じ危険にさらされているという連帯意識から、分け隔てのない助け合いの精神

が助長されるのである。

「災害ユートピア」で生まれるエンパシー

国家による統治や日常の秩序が機能しないような状況下では、人間は自然に相互扶助を始めると唱え、それを「災害ユートピア」と呼んだのは、アメリカの作家レベッカ・ソルニットであるが、彼女の著書『災害ユートピア——なぜそのとき特別な共同体が立ち上がるのか』（巫紀書房、2010年）では、そのような「緊迫した状況の中で誰もが利他的になり、自身や身内のみならず隣人や見も知らぬ人々に対してさえ、まず思いやりを示す」（10-11頁）事例が多く紹介されている。災害はウィルスと同様、分け隔てなく人々を危機的状況の中に否応なく引きずり込むが、それ故にその真ただ中で人々は、隣人を救うために、自己犠牲的に、主体的に行動することに躊躇しなくなるという。

絶望的な状況でも人々が前向きにポジティブな感情を持てるのは、「人々が本心では社会的なつながりや意義深い仕事を望んでいて、機を得て行動し、大きなやりがいを得るからだ」（18頁）とソルニットは主張する。そのような利他的行動はむしろ本能的なもので、平時においてそれを妨げているのは、むしろわたしたちの経済や社会の仕組みであって、それらが機能しない時に初めて人々は分け隔てなく助け合えるということになる。平時には、家族的、党派的、部族的、あるいは国家的なレベルで、準拠集団の結束を固め、維持するために「絆」が強調されるが、そのことはしばしば平等な人間関係を疎外する方向に作用するのである。

私たちの魂はどこにあるのか

『ぼくはイエローでホワイトで、ちょっとブルー』（新潮社、2019年）で一躍注目を集めたブレイディみかこは、『他者の靴を履く——アナーキック・エンパシーのすすめ』（文藝春秋、2021年）の中で、対象を選んで共鳴したり同情したりする「シンパシー」に対し、対象を限定せずに相手の感情や考えを理解しようとする自発的な努力を「エンパシー」とし、現代社会に必要なのは後者であると説く。ソルニットが指摘した、「災害ユートピア」において生まれてくるポジティブな感情もエンパシーに近い。マスメディアは私たちのシンパシーを必要以上に刺激する傾向にあるが、トカルチュクのいう「魂」を取り戻すために本当に必要なのはエンパシーではないだろうか。

（文学部教授）

コロナ禍の心理学

串崎 真志

ソーシャル・ディスタンス、マスク同士での会話や、オンライン上でのやりとりなど、コロナ禍は、私たちのライフスタイルとコミュニケーションを大きく変えました。心理学では、このようなコロナ禍の影響について、さまざまな研究を報告しています。

例えば、マスクを日常的にするようになり、会話を難しく感じている人もいますでしょう。マスク同士の会話が困難な原因は、相手の表情が見えず、感情を読み取りにくくなるためと考えられます。イタリアの心理学者は、表情の写真を見せて、感情を当てる課題（情動推測課題）を、幼児（4歳）・児童（6歳）・成人（27歳）に実施しました⁽¹⁾。その結果、大人はマスク無しとマスク有りの写真で、正解率がそれほど違いませんでした。一方、幼児と児童は、正解率がぐんと低くなりました。子どもは幸せな表情を、悲しんでいるとか、怒っているとか、怖がっていると読み違えてしまうのです。コロナ禍で、子どもたちもマスクを付けて授業を受けたり、遊んだりすることが定着しています。今後、マスク生活が長期化することで、特に子どもたちの表情認識にどのような影響があるのかが、懸念されます。

次に、ビデオ・コミュニケーションについて、見てみましょう。この2年間で、オンライン授業やオンライン会議が、一気に普及しました。これは便利な反面、さまざまな問題が指摘されています。その一つが疲労です。ビデオ会議が疲れやすい（いわゆるZoom疲労）理由として、4つの仮説が提唱されています。例えば、知らない人同士で長時間、直視するというハイパーゲイズ説。考えてみると、対面状況では、よほど親密でない限り、長時間お互いに見つめ合うことはありません。また、ビデオ・コミュニケーションでは気持ちが伝わりにくいため、ジェスチャーを大げさにする必要があり、それが負担であるという説。そして、自分の顔を見続ける

ことで、自意識が強くなり（鏡不安）、注意散漫になってしまうのがよくないという説。さらに、画面に収まるためにじっとしている必要があり、それが疲労の原因になるという説があります。

スウェーデンの研究者が大規模調査（1万人）を行い、これらを検証しました⁽²⁾。その結果、どれもズーム疲労に影響していました。そのなかで最も影響していたのは、身動きできないことでした。少し意外な結果です。それゆえ心理学者は、オンライン授業やオンライン会議のときは、できれば30分ごとに立ち上がって動きまわろう、と提案しています。なかなか難しいとは思いますが、試してみてください。

そして、コロナ禍の影響として、心理学者が最も心配しているのが、孤独感です。孤独感を募らせている人が増えているのではないかと、いうわけです。アメリカの高齢者（64歳）を対象にした調査では、コロナ流行以降に、中程度の孤独感を感じている人が、66パーセントいました⁽³⁾。ここでいう孤独感は、「あなたは、自分に仲間付き合いがないと感じることがありますか」など3項目に、「ほとんどない」（1点）、「たまにある」（2点）、「よくある」（3点）で自己評定（セルフチェック）して、合計点（3点から9点の間）が5点以上の人を、中程度の孤独感と判断しました。また、ドイツの青年（16歳）を対象にした研究では、コロナ禍前後で追跡調査し、外向性の高い（つまり社交的な）人ほど、ロックダウンで孤独感が増加していることがわかりました⁽⁴⁾。これは、人付き合いが活発だった人ほど、コロナ禍で活動を制限されて、心理的な影響を受けたものと考えられます。さらに、スイスの成人（31歳）を対象にした調査によると、考え込みやすくなっているほど、孤独感を感じていました⁽⁵⁾。あとでも述べますが、気持ちの切り替えは大切です。

日本のデータもあります。日本人2,000名（18

～60歳)を対象にした調査では、41パーセントが高い孤独感(上述の尺度で6点以上)を感じていました。これは深刻な結果です。それだけではありません。孤独を感じているほど、感染予防行動(マスクの着用、手指の消毒、社会的距離)をしないことがわかりました⁽⁶⁾。皆が感染予防行動を取らないと、感染症は収まりません。その意味でも、孤独感の緩和は重要です。

そもそも、コロナウイルス感染症に対する態度は、人さまざまです。次に、コロナ不安を取り上げてみましょう。コロナ不安は、「新型コロナウイルスがとても怖い」「新型コロナウイルスについて考えると不快になる」「新型コロナウイルスについて考えると手汗をかく」などの項目で定義されます。コロナのことを考えると、まさに不安になるというわけです。このような感染症に対する警戒心も、個人差が大きいのです。

ただし、コロナ不安は悪いことばかりではありません。アメリカの大学生を対象にした調査によると、コロナ不安が高いほど、むしろ感染予防行動をしっかりすることがわかりました⁽⁷⁾。コロナに対する適度な不安は、むしろ必要なのかもしれません。ちなみに、日本の中学生を調査した結果、コロナ不安は抑うつ気分(物事に対してほとんど興味が無い、気分が落ち込む、など)と、相関が見られませんでした⁽⁸⁾。ただし、日本人6,750名(10代～60代)を調査した結果では、コロナ不安は全般性不安の症状(心配することを止められない、など)と中程度に相関するようなので、やはり過剰なコロナ不安はよくないと思います⁽⁹⁾。

もう一つ、コロナ不安とよく似ていますが、コロナ・ストレスという概念を紹介しましょう。コロナ・ストレスは、「ウイルスに感染しないか心配している」「ウイルスから家族を守れないことを心配している」「基本的な衛生管理(手洗いなど)ではウイルスから自分を守るのに不十分ではないかと心配している」などの項目で定義されます。まさに、コロナに感染するのではないか、という心配です。

どのような人が、コロナ・ストレスを抱えやすいのでしょうか。繊細な性格であるほど、コロナ・ストレスが高いことがわかりました⁽¹⁰⁾。繊細な性格は、「生活に変化があると混乱する」「強い刺激に圧倒されやすい」「他人の気分に左

右される」「大きな音で不快になる」などの項目で定義されます。そして、繊細な性格でコロナ・ストレスが高くなるメカニズムも、わかってきました。どうやら繊細であるほど、気持ちを切り替えにくく(回復力が低く)なることが要因のようです。ここでいう気持ちの切り替えとは、「私はつらい時があった後でも、素早く立ち直れる」「私はストレスの多い出来事を乗り越えるのに長い時間はかからない」といった考え方です。逆にいうと、ふだんからこのような信念をもっている人は、コロナ・ストレスにも強いのです。

コロナ・ストレスを低減する要因をもう一つ、見てみましょう。アメリカの成人(37歳)を対象とした追跡調査では、ホープという特徴が高いほど、コロナ・ストレスが低いことがわかりました⁽¹¹⁾。ホープは、「窮地を脱する方法はいろいろ考えられる」「どんな問題でも、方法はいくらでもある」「自分にとって大切なものを手に入れるために、いろいろな方法を考えることができる」などの項目で定義されます。コロナに限らず、何事に対してもあきらめず、さまざまな方法を追求する姿勢が大切だと思われます。

コロナ・ストレスの低減については、もう少しわかりやすい工夫も可能です。それは、適度な運動です。スペインの成人(31歳)を対象にした調査によると、外出禁止時に運動頻度が増えた人は、減った人に比べて、ポジティブな気分が高いことがわかりました⁽¹²⁾。さまざまな知恵で、コロナを乗り越えていきましょう。

(文学部教授)

文献

- 1 doi:10.3389/fpsyg.2021.669432
- 2 doi:10.2139/ssrn.3820035
- 3 doi:10.1177/0733464821996527
- 4 doi:10.1111/jora.12648
- 5 doi:10.1007/s10902-020-00326-5
- 6 doi:10.1093/pubmed/fdaa151
- 7 doi:10.2196/23218
- 8 doi:10.1007/s11469-020-00368-z
- 9 doi:10.1371/journal.pone.0246840
- 10 doi:10.1016/j.paid.2021.111183
- 11 doi:10.1080/16506073.2021.1877341
- 12 doi:10.3389/fpsyg.2021.620745

性の多様性を認めあうキャンパスをめざして

—— 龍谷大学の現状と課題から

堀 あきこ

1. はじめに

2021年10月8日(金) 第5回研究学習会として、龍谷大学宗教部の安食真城先生を講師にお招きして、「性の多様性を認めあうキャンパスをめざして——龍谷大学の現状と課題から」をオンライン開催した。

龍谷大学人権問題研究委員会は、2017年に「セクシュアルマイノリティの現状とニーズに関するアンケート調査」を実施、858人(学生710人、教職員148人)の回答を得て報告書を作成、その後も、性の多様性を認めあうキャンパスを作るための様々な取り組みを進めている。また、龍谷大学は同年、「性のあり方の多様性に関する基本指針」を策定。「性的指向や性自認など、性のあり方は多様であり、これらに関する差別や偏見を解消し誰もが自分らしく安心して過ごすことができる大学や社会を目指すことは、すべての本学構成員が取り組むべき課題」と明記されている。

本学習会は、龍谷大学で実践されてきた、性のあり方の多様性に関する取り組みの内容と現状、今後の課題をうかがうことで、関西大学における人権啓発の充実につなげたいという目的で企画した。本稿は筆者が研究学習会記録としてまとめたものである。

2. 取り組みがはじまった経緯と内容

2015年、ある研修会で「セクシュアルマイノリティ(LGBT)の学生は1クラスに1人か2人はいますよ」と話題になったが、龍谷大学で何か取り組みがされているということは聞いたことがなかった。この経験が出発点となっている。

龍谷大学には様々な人権関係組織があり、その1つに人権問題研究委員会がある。部署ではなく、推進体制としては大きくはないが、全校でのプロジェクトを実施できる機関である。2016年、大学が人権に関する基本方針を策定することとなり、人権問題研究委員会はセクシュアルマイノリティへの対応を早急に検討すべき課題として報告したが、「本当にそんな人があるのか」という反応であった。そのため、公式に

情報収集を行い、当事者の学生の声を聞く機会を設けた。学生サークルは以前にはあったのだが、この時にはなくなっていた。そこで、人権の学びと文化を醸成していくことを目標に掲げる宗教部として学生に協力し、「龍谷大学LGBTs交流サークル にじりゅう」(非公式サークル)が設立した。

【アンケートと基本指針】

同年11～12月に「龍谷大学におけるセクシュアルマイノリティの現状とニーズに関するアンケート」を実施した。任意回答で、学生と教職員858人中、セクシュアルマイノリティだと自認している人が130人(学生17.3%、教職員4.7%)で、レズビアン・ゲイ・バイセクシャル・トランスジェンダーだけでなくXジェンダーの学生もいることが分かった。また、学生から嘲笑的言動や差別的言動を受けた当事者が47.7%、教職員から嘲笑的言動や差別的言動を受けた当事者が16.1%存在していた。同性愛をネタにして笑いをとる教職員や、「同性愛は病院に行けば治る」といった発言など、寄せられた赤裸々な声を報告書として提出し、その後は、このエビデンスを元に活動を進めていくことが可能になった。

2017年12月、アンケートを受け「性のあり方の多様性に関する基本指針」が策定。4つの指針が明記された。

- 教育、学修、研究、就業等の環境において、性のあり方に関する偏見や差別が生じることがないように不断の学習と啓発に努めます。
- 具体的な対応にあたっては、悩みや生きづらさを抱える本人の意思を尊重して合意形成を目指します。
- トイレや更衣室等の利用にあたり、戸籍上の性別等にかかわらず性自認にしたがって自らが選択できるよう、環境整備と理解の醸成を図ります。
- 性のあり方に関する個人情報の保護を徹底します。

また、アンケートの結果から、男女トイレと別に設置されている多目的トイレの表示を2018

年から「だれでもトイレ」に変更している。

【多様な取り組み】

卒業生からの申し出により、冊子「大学生のためのLGBTQサバイバルブックVol.1 先輩たちのライフストーリーズ」を発売（2018年）、「Vol.2 それぞれの結婚のカタチ」「Vol.3 みんなのキモチ」（2019年）も刊行した。関西の「レインボーフェスタ」や「東京レインボープライド」にも出展し、活気と前向きさを受け取るだけでなく、卒業生の立ち寄りも経験した。

気軽に自由な交流の場として、ジェンダーやセクシュアリティなどについて語り合う茶話会「SOGIカフェ」を2018年から半期～1年に1回程度で開催。性的指向や性自認などに関する悩みや困りごとについて相談できる「ジェンダー・セクシュアリティ相談（GS相談）」も試行的に開設（2019年～）している。

2012年に社会学部ではじまったセクシュアルマイノリティをテーマにした人権研修会は、2015年から全学人権講演会としても開催するようになり、関心は高まっている。

3. 今後の課題

2018年に、職場におけるセクシュアルマイノリティへの取り組みの評価指標である「PRIDE指標」のゴールドを獲得した。現在はランクがシルバーになっており、取り組みが不足していることを学長会に報告し、改善を目指している。本学で指標に達しているものと不足しているものは以下の通りである。

教職員向け

- 応募時の履歴書やエントリーシートで性別記載を求めないこと（○）
- 性的指向や性自認に関する嘲笑的言動やアウトティングがハラスメントと明記すること（○
セクハラの実例に書き込んだ）
- 教職員の同性を含むパートナーを配偶者として認めること（×）
- 自認する性にもとづく通称名の使用を認めること（×）

学生向け

- 各種証明書等に不必要な性別記載がないこと（○）
- 出席簿は性別マークを排除すること（○ 実習科目等、学生の性別情報が必要な場合、教員から申し出があれば渡すようにしている）
- 改名した卒業生に改名後の名前です卒業証明書を発行すること（○ 2021年10月から実施）

- 性自認にもとづく通称名を使用できること（× 認めている学部もある。2023年の実現を目指す）

こうした取り組みを進めている一方、学生企画の男装&女装コンテストや、入試部のイベント「モテメイク」講座などもあった。これらに対しては、「気づいたときに行動する」というモットーで担当者に連絡して対話をしてきた。人権への取り組みは「次から注意してもらう」ことの積み重ねであると実感している。

また、教職員の意識変化が重要であることから、教職員対象の講座を開催し、不参加の場合でもニュースレターにして情報を届けている。

大学として組織的に取り組みが推進できているとはいいがたい現状ではあるが、宗教部以外の組織でも取り組みが始まりつつあり、「点が面になるよう」活動中である。

4. お話をうかがって

アンケートによる現状把握を元に、様々な取り組みをされてきたことがよく分かり、特に「やれることは何でもやる」とおっしゃっていたのが印象的だった。文章にまとめるとスムーズでスピーディな活動のように見えるかもしれないが、実際には、抵抗やクレームもあるという。また、質疑で指摘があったように、学生当事者と一緒に活動していることが大切だと思ったが、学生サークルが公式になるとサークルの保険加入がカミングアウトになってしまうという問題や、活動が人的なつながり頼りになるため、先行きが分からないということもある。組織化の難しさからも、全学としての支援が必要なのだと感じた。



画像1：SOGIカフェのポスター



画像2：ジェンダー・セクシュアリティ相談のポスター

（非常勤研究員）

2021年度 人権問題研究室 公開講座

回	日程	テーマ	講師	会場・時間
103	10月22日(金) ※	もうひとつの大阪探訪 ～被差別マイノリティの歴史をひもとく	吉村 智博 (委嘱研究員)	尚文館 マルチメディアA V 大教室
104	6月25日(金)	地域で暮らし学び働く「外国人」と人権	内田 晴子 (委嘱研究員)	午後 1 時～ 午後 2 時30分
105	10月22日(金)	障害者差別解消法とリーガル・エンパワメント ～権利条約採択15年 差別撤廃の現状と課題を通して～	姜 博久 (委嘱研究員)	※第103回のみ、午後 2時40分～4時10分 (新型コロナウイルスの感染拡大状況を受け、日程を延期して第105回と同日開催)
106	11月26日(金)	沖縄の米軍と性暴力	仲間 恵子 (委嘱研究員)	

2021年度 人権問題研究室 研究学習会

日程	テーマ	講師	会場
4月9日(金)	「大学生のキャリア教育と支援」 -基礎的・汎用的能力の育成と個人差のはざままで-	湯口 恭子 (近畿大学働き方改革推進センター専任講師)	人権問題研究室 ※オンライン併催 *オンラインのみ で開催
5月14日(金) *	部落女性と婦人水平社	宮前 千雅子 (委嘱研究員)	
6月11日(金) *	宗教史と部落史の架橋をめざして -『シリーズ・差別と宗教』の挑戦-	吉村 智博 (委嘱研究員)	
7月9日(金) ※	名古屋市港区周辺が「ムスリム・タウン」 になった理由	マリyam 戸谷 玲子 (子どもと女性のイスラームの会 代表理事)	
10月8日(金) *	性の多様性を認めあうキャンパスをめざして -龍谷大学の現状と課題から-	安食真城 (龍谷大学宗教部課長)	
11月12日(金) ※	子ども虐待の現状と法的対応および心理支援 -事例検討を含めて-	北村 由美 (研究員、心理学研究科(専門職学位課程)教授)	
12月10日(金)	文化の連続性と非連続性：北部ルソン島の低地民と山地民の文化的境界	熊野 建 (研究員、社会学部教授)	
1月14日(金) *	部落問題の「無化」を問う	黒川 みどり (静岡大学学術院教育学系列 教授)	

編集後記

今号では、若槻研究員による、部落問題研究班を中心に行った大阪市浅香地区でのフィールドワーク報告、吉村研究員による、大阪府水平社設立の地である天王寺公会堂についての論考、宮本研究員と串崎研究員による新型コロナウイルスをテーマとした論考、そして研究学習会の記録として、安食真城氏による龍谷大学における性の多様性を認めあうキャンパスづくりのための取り組みの紹介と、計5本の報告・論考が寄稿された。

マスク着用と手指の消毒、人と人との距離を取るといった「新しい生活様式」が定着し、コロナ禍以前の生活様式が遠い過去のように思えるほど、新型コロナウイルスは私たちの生活を一変させた。長期の現地調査を行う人類学者で

すら、フィールドを国内に変えたり、オンラインで調査を実施したりと、研究対象と研究方法の変更を余儀なくされている。コロナ禍以前の生活に戻るにはまだもう少し時間がかかりそうであるが、国内外での調査報告が再び本誌に掲載される日を待ち望んでいる。

(山ノ内裕子)

関西大学人権問題研究室室報 第68号
2022年2月28日発行
発行/関西大学人権問題研究室
〒564-8680 吹田市山手町3丁目3番35号
電話 (06) 6368-1182
FAX (06) 6368-0081
<https://www.kansai-u.ac.jp/hrs>